

✳️ 奨励賞受賞作品

交通博物館の再生

林 義尚

制作主旨

わが国の博物館建設の歴史はすでに120年を経過し、時代の推移とともにその数は増加し、市民の博物館に対する考えも変化してきた。博物館の増加は、市民が日常生活において知的満足を得る場を日増しに強く要求し、かつその要求が急速に変化してきた点にある。展示形式においては、従来の資料展示だけでは満足できなくなってきた。展示形式、内容にとどまらず、ミュージアムショップ、カフェテリアのような展示空間以外の空間（付加空間）にまで及んでいる。そこで、博物館側も、市民自らに主体性をあずける新しい機能を施設の柱として、楽しんで学ぶことのできる博物館を考えるようになった。ここ交通博物館もそういった博物館のひとつである。

大正から昭和にかけて国電中央線の始発駅として須田町の交通の要であったという歴史をもつ交通博物館は、当時の躯体をほとんどそのまま利用し、増改築を繰り返し現在に至っている。展示形式や展示内容、食堂、映画館といったものも市民の要求に応えるように配置されたが、その場しのぎに過ぎず十分な計画がされなかった。1日を博物館という空間の中で楽しく学び、過ごせるということが現在求められているからである。これはいわばアミューズメントとミュージアムとが生かす“アミュージアム”である。本計画では博物館をミュージアムとしてではなく、楽しんで学べるアミュージアムとしてとらえなおし、外観、展示構成、付加空間ともにより魅力にあふれた博物館へ再生するものである。

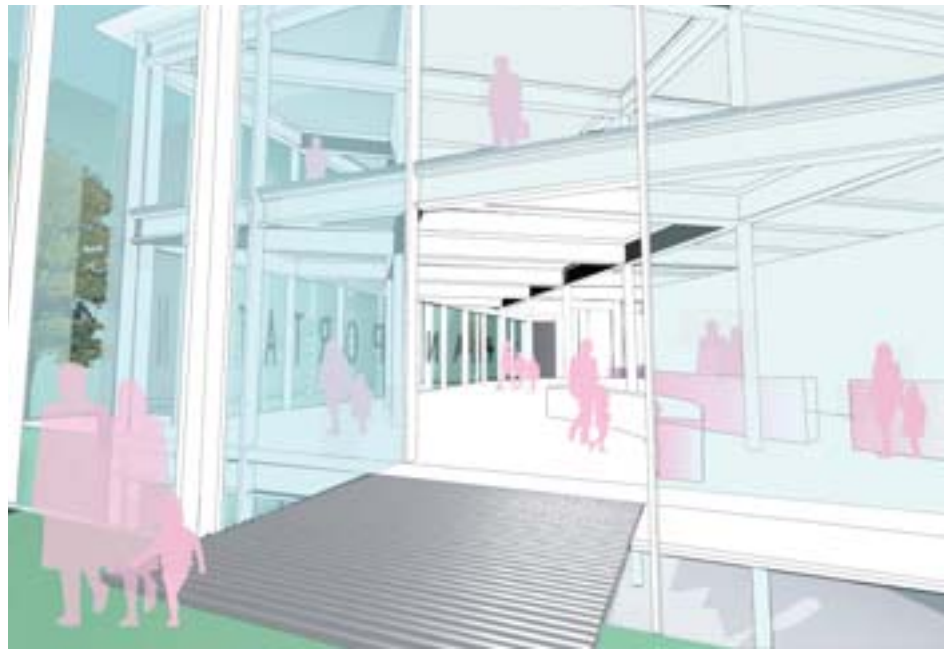
講師評：若色峰郎・渡辺富雄

現在の交通博物館は昭和11年に解体された2代目の万世橋駅本屋の躯体を流用して設置されたもので、当時の面影は現在の交通博物館のいたる所に見いだすことができる。来館者は年々少しずつ減少しているとはいえ、年間35万人（特に子供達）を越え、貴重なものとなっている。林君の提案はこの博物館をアミュージアム（アミューズメント+ミュージアム）にリニューアルするという提案である。

林君は、卒業研究でもこの博物館を題材に、来館者がどのような展示物に興味をもち、どのような観覧行動をしているか丹念に観察調査している。その知見を踏まえて、高架下の部分をえぐり取り展示スペースを拡大するなど、一つ一つの展示構成を再編成している。このプロセスを評価したい。古い建築物を再生する時にはよくある手法だが、ガラスとパンチングメタルで建物を覆い、その間にカフェやレストスペースなどの新しい機能を付加し、外部との柔らかな関係を創り出している。極めて実現性の高い提案になっていると思う。



エントランス増築部



エントランス外観



南側鳥瞰図



パンチングメタル増築部

